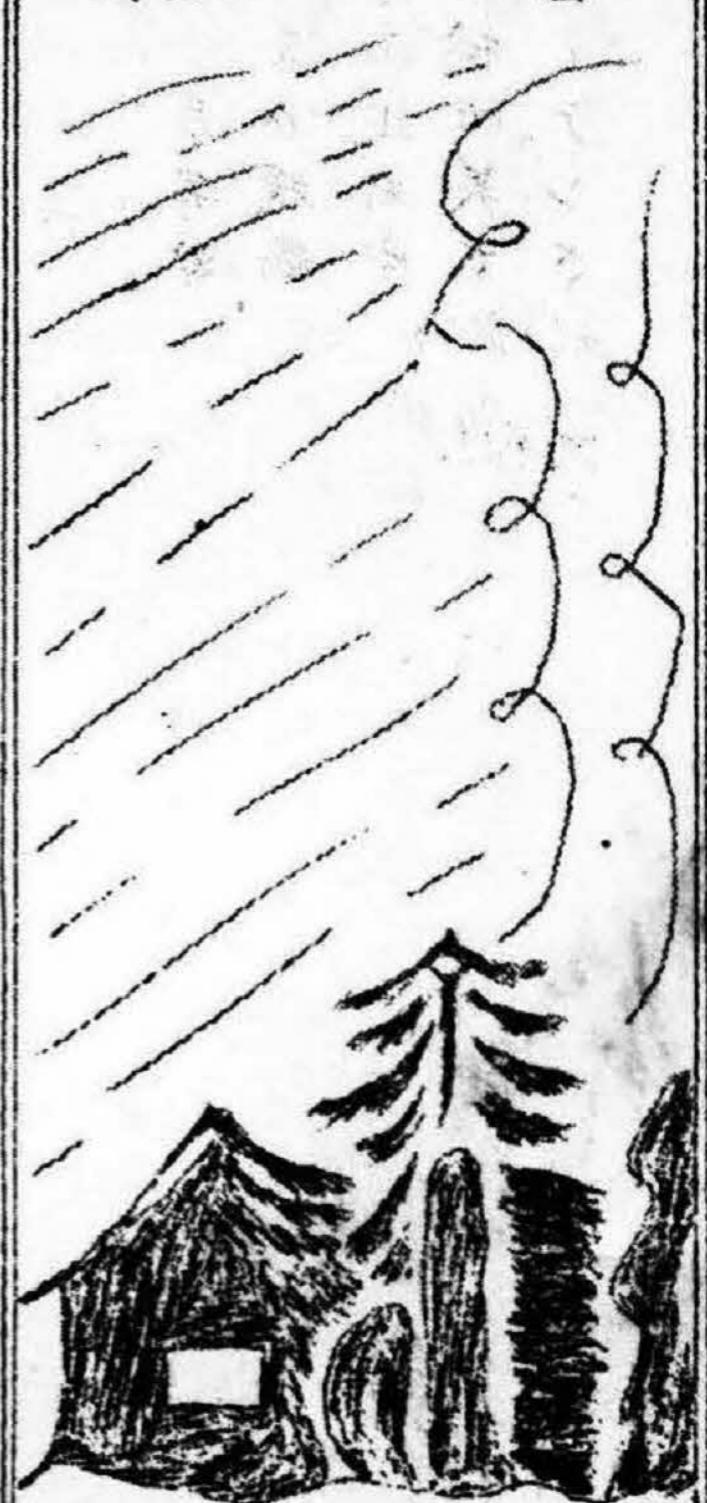


會報



昭和七年十二月十日発行

通卷二十四号

阿蘇行

十一月三日一人で阿蘇へ行く。坊中からバスで登つて朽木温泉へ徒歩で下る。別段珍しい事もない。煙を吹く噴火口のあるだけが他の山と異ふ位。噴火口のある中岳の近辺は一面の灰丘だ。風が吹くと眼や口を開けて居られない。第四火口の縁丘を下つて砂千里を歩く。ウインドクラストが出来てゐて、所々堅い所や疏がもぐり込んで了ふ軟い所があり、足跡もはつきり残つてゐて完然雪原を歩く氣持だ。火口の東に聳える高岳には寺間もなく斜面大とつつく。熔岩がくづれて落ちてごろごろしてゐるところ雪庇の下に転つてゐる雪の大塊と同じ氣持。火山灰が積つてゐるので、靴がごぼく入つてすひ歩き難い上に、下の堅い層と上層の軟い灰との間の附着力がない為め一步登つて二歩滑

り落ちたりする仕末、苦心慘胆の後、緩い斜面でジッグザッグに進む。スキーや脱いでネルシエードでステップバイステップ攀がた五色のがンチメン落しを想ひ出す。昨冬鹿島槍リにもスキーを担いで登つた事もあつた

け。ふとふり返れば阿蘇への散歩者達火口丘から一散々自動車終点に走る可く駆け下りてゐる。それが風が吹いてるもんだから、盛大に灰煙を上げるので二百メートルこちらから見てみると、ショナードーの「獵狩」の光景そつくりである。一人が走り下りるとペツと立つた煙の後に何十人もが一せり、大々煙を脚元に湧かせ乍ら馳せ下るのを眺めて、私は思はず快哉を叫んだ。

冬は鳥帽子岳の下、旧火口原の千里ヶ浜に二尺余の処によつては八尺の積雪があるので、スキーリをやりた登つてくるさうだが、冬でなくとも、この灰の斜面でスキーが出来やしないか知ら。阿蘇の火口原の千ヶ浜に二尺のを考島で知つた時、私は直ぐ工場の倉庫に山と大きくなりな三井疏安は愉快に乾いて結晶の積まれた疏安を思つた。硼酸の様に乾いて結晶のと今でも考へてゐる「阿々」。柄の木の温泉は大いによろし。但し山の湯でふ

感じは余りない。熱海や函根程俗化してもゐない
悪くないらしい。
小山旅館といふのは理髪部や温泉ブルや撞球台がある、そしておほゞ立の整った娘さんがある。阿々。
(中森)

越後から日光までの山旅
十月十四日(晴) 小出駅→大湯東榮館(九。〇)
ト枝折峠(十二。四。一、四。) →石抱橋(二、四。〇。一、三。二。) →神峰(五。〇。) →須原口(五、五。五) →銀山寺(六、四五)。

十月十五日(曇、雨) 銀山寺(六、三。) →大津峠(八の分岐点、七、三。) →七、四。) →晝食(一〇、四。) →大津峠(三、三。) →麒麟平(五。〇五) →陰枝岐丸屋(五、四。)。

十月十六日(雨) 丸屋(九、三。) →赤坂華(二、二。) →一、二。) →燒山峠(二、五。) →尾瀬湯長藏小舍(二、四。五)。

十月十七日(雨、晴) 長藏小舍(一、二。) →沼尾(一、二。) →赤田代温泉小舍(一、五、五。一、二。) →三條ノ滝(二、四。一、三。) →帰途平滑ノ滝へ往復約四十分り温泉小舍(四、三。)。

十月十八日(晴) 小舍(八。〇。) →燧岳柴安高頂と

(一一。一。一、一。) →道嘉頂と(一、二五) →沼尾(二、四。) →長藏小舍(四。〇)。

十月十九日(晴) 小舍(八。〇。) →小淵沢田代(八。五五。) →引馬峠路分歧点(二、一。一、二。二。) →大ハビーク北側、水場デ晝食(二、四。一、二。三) →鬼怒沼(一、五。一、二。二。) →ハ丁ノ湯温泉小舍(一、三、四五)。

十月二十日(晴) 小舍(七、一。) →手白沢(七、四。) →湯沢噴泉塔(九、二。一、九、三。) →晝食(二、一。一、二、四。) →西沢金山(一、六。五) →金田峠(六、三。) →(一、四。) →日光湯本(二、三。) →馬返(大、三。) →帰京。

吹原君が先年行かれたコースを殆んどそのまま、
の分岐点、ヘ七、三。) →七、四。) →晝食(一〇、四。) →大津峠(三、三。) →麒麟平(五。〇五) な一週間でした。

第一日、此の春所謂越後の馬鹿雪に八時間の難行軍をやらされた小出駅、大湯向は朝靄をついて自動車で一走り。東榮館のオヂさんは相変わらずの調子。当たしてあた鶴松が村杉に入つてゐないと聞け、少し時刻が遅いが今日の泊りは銀山寺と元気に出かけた。駒ヶ岳の威容を仰がながらひた登りだ。登る枝折峠は、雪が無くても矢張りつらい峠だ。紅葉美しき北又川峡谷、殊に石抱橋のあたりなどながら一幅の名画だ。暮れぬうちにとスビ

ドを上げ須原口からラテル木をつける。第二日、佛壇の前に寒い夢を結んだ翌朝、危い天候を免れながら出かける。只見川の渓流は紅葉に映えて中々素晴らしい。開墾事業は大分進んで桧枝岐に因幡へ移つてからも尚二ヶ所程部落がある。いよいよ沢から離れる所で晝食をとり登り出す。前に人が居れば雨が降つても笠はいらないと云ふ急登路も農村救済土木事業のお蔭で大分楽に直されてゐた。峠の頂上は朗らかな草原なのだが何しろ折からの氷雨に走るが如く通りすぎる。桧枝岐の谷は唯元る燃えるが如き構の紅葉、まさに峰頭紅の焰をあげるとばかり、蓋し天下無双であると云ひたい位。今日も亦ラテル木の厄介になつて丸屋に着く。きのこ料理に満腹し爐端に出かけて熊狩の話や此の十八日が七週忌だと云ふ早大生会津駒遭難の一々を聞きたりする。

感煙尾瀬も大抵は久慈の尾瀬沼に入る。日本離れのした焼山峠南斜面、雨に晴れたので滝を見てみる事。

小舎は出来立ての建物、今年から小舎番常住の由。

第五日、小舎から奥本に紫安島へ登る路が此の八月出来た。明瞭であり且つ樂である。尾瀬原を俯瞰しながら登るのだから気持がよい。頂上の眺望は満点、桧枝岐峡谷の紅葉は此処から見て最も美しい。夕方沼で魚釣り、ボヤと云ふ三寸程の魚だが先づ三十分で桶一杯、大概くたびれてしまふ。

第六日、いよいよ尾瀬別れを告げ鬼怒沼林道を行く。鬼怒沼にポンと吐き出された時右前方に俯く燧岳の頭を見出して一寸びっくりしてしまつた。夜は月光を浴びて満々たる野天の温泉につかる。第七日、噴泉塔を経て西沢金山へ出るショートカットを行く。金の値が上つた為だらう廢坑西沢金山に今数十人の坑夫が仕事してゐる。金田峠から俯瞰する刈込湖は何時見ても非常に印象的だ。元気でまかせて馬返まで歩いたが足はいゝか蛇足の意味だつた。

(高見要他一名)

根継ぎで檜原村から上野原に通ずる峠の一つである。五万の地図によると柏木野から片道線路が通

じてゐるが、それほど良い路ではない。新宿を午前六時二十三分の甲府行で発つて立川で乗換へ、がソリンカーで五日市に到りバスを利用して十里木へ八時二十五分着いた。秋川の谷は青木平から下毛郷の間が最も佳いようである。南秋川に入つてからは本宿箕野間が最もよろしい。此の川添の路は南秋川の奥まで自動車が通れる。南秋川に入つてからは本宿箕野間が最もよろしい。此の川添の路は南秋川の奥まで自動車が通れる。南秋川に入つてからは本宿箕野間が最もよろしい。此の川添の路は南秋川の奥まで自動車が通れる。

（四）

は良し風は無し空つて居ると睡くなり様な天気である。予定よりも大分時間を費したので用意して来たスケッチも試みずに降り始めた。熊倉山への経と岐れで一路上野原に向ふ。見晴しのよい方やトの緩かな降りは誠に気持ちのよいものだ。尾根通り下岩の宿場へ出られるのだが、地図に載つて上岩に出たので隨分迂回して了つた。上野原町から停車場迄は可成遠いので何時も構まざれる。五時十五分駅に着いた。五時四十九分の汽車に乗り、八王子辺から前後不覚に垂つて了つた。

此の後は殆んど日向ばかり通じてるので日和さへ良ければ冬でも暑い位である。冬季の散歩は好適であらう。夏季は水がないので薦められないので好適であらう。秋季は十一月に入つてからがよい。

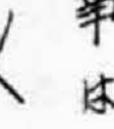
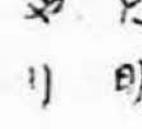
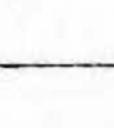
マツタアホルン北壁の登攀（続）

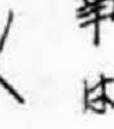
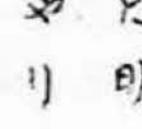
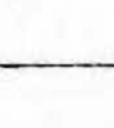
（蟹）

前編シユミット兄弟が最初のビゲオークをした所まで訳したが、あれは断つてもあつた様にアルハインジエーナルからであつた。その後浦松氏がS.A.C.（スヰス山岳会）の機関誌 "Die Alpen" にトニー・シエミット自身の書いたもの、ある事まで写真を撮つて一時間遊んで了つた。日當りを教へられたので、早速日本山岳会へ行き調べて

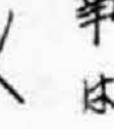
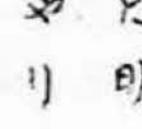
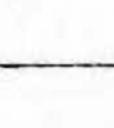
見た。Vol. VII. Seite 401 K "über die Matzterhorn - Nordwand" "ersten Durchstieg (von Toni Schmid) といふのを見出し此の方があ文獻的に優れであると思ふので、本号に於てはその手記レム就いて訳して行く事とした。

× × × ×

曙光が認められた。吾々はそれを欣喜の叫びを以て迎へた事は云ふまでもない。然しそれと共に寒氣はいよいよ  加つて来た。ても八月一日は遂に明暁の如き朝風の中に歯をがタ  やり莫と許りに尚一歩突進した。そして岩から氷を剝さうとピッケルをドン  打込んで見ながら氷頭を譲った。彼が十步突進した時、更に平へ打込まれば多少でも確保出来るのであるが、それが文獻的に優れてゐると思ふので、本号に於てはその手記レム就いて訳して行く事とした。

曙光が認められた。吾々はそれを欣喜の叫びを以て迎へた事は云ふまでもない。然しそれと共に寒氣はいよいよ  加つて来た。ても八月一日は遂に明暁の如き朝風の中に歯をがタ  やり莫と許りに尚一歩突進した。そして岩から氷を剝さうとピッケルをドン  打込んで見ながら氷頭を譲った。彼が十步突進した時、更に平へ打込まれば多少でも確保出来るのであるが、それが文獻的に優れてゐると思ふので、本号に於てはその手記レム就いて訳して行く事とした。

K 沿つて登つて行き、そこ下今度はフランツに先頭を譲つた。彼が十步突進した時、更に平へ打込まれば多少でも確保出来るのであるが、それが文獻的に優れてゐると思ふので、本号に於てはその手記レム就いて訳して行く事とした。

曙光が認められた。吾々はそれを欣喜の叫びを以て迎へた事は云ふまでもない。然しそれと共に寒氣はいよいよ  加つて来た。ても八月一日は遂に明暁の如き朝風の中に歯をがタ  やり莫と許りに尚一歩突進した。そして岩から氷を剝さうとピッケルをドン  打込んで見ながら氷頭を譲つた。彼が十步突進した時、更に平へ打込まれば多少でも確保出来るのであるが、それが文獻的に優れてゐると思ふので、本号に於てはその手記レム就いて訳して行く事とした。

"Wir kommen nicht weiter." (もう行かれないと)。トランツは下へ向つて叫んだ。 "Wir müssen versuchen dem Schweizergrat zu erreichen." "(何とかしてスイス山稜へ出なきやなるまいよ)"

"Was?" (なんだって)と私は上へどなりつた。

"Jetzt willst du die Waffen strecken, so nah zum Ziel? Versuchs doch mit einem Quergang nach rechts, dort scheint ein Durchkommen möglich." (先は見えてもちやないか、今んなつて降参しゃうついつかのか、右の方へ行って見ろ、そこならどうやら切り抜

第 三 年 金 葉 樹 會 報 第 九 号

の手は非常に重くなつた。それからゴロゴロと鳴る胃の腑へはチヨコシートを投り込んで満足させてしまつた。まだ吾々はあゝ帰ろしく厄介な難しい壁から離れてしまつたのだと信ずる事が出来なかつた。山はまだ己が敗北を認めたが如く、火の束の様か山稜には雪の打つ音がごろ／＼となり、吾々には全く勝利の気持ちは起つて居る余地がふかつた。

荒天の絶頂が過ぎ去つた時吾々は避難所を離れた。今までの困難さに較べるとスヰス山稜の降りは最早何のわざらはしさも無かつた。一肩の下へ未だかと思ふと忽ち最初よりももと恐ろしい荒れがほつ発した。雪と霰が奔流の如く岩場を落しまひ邪魔にこそなれ助けには少しもならなくなつた。やつとの事で午後五時三十分ソルハイ小屋に着いた。やつど身体に着いた時には上着は全く氷の甲冑になつた。やつてから小屋中にある毛布を皆ひつかぶつてしまつた。忽ちの内に最後の食料も食ひ盡し、その後で長い間憧れて居た様ふ睡りへと追入つた。

翌日（八月二日）の正午眼が覚めた時外はまだ大雪は吹きつもつてゐた。玉蜀黍と古

いパンの残りで燃の様赤餓を鎮め、又々眠り込んだ。

八月三日輝しき太陽の光は吾々を覚ました。此の間あらしは殆ど絶間なく三十六時間蒸れ狂つてゐたのだ。早速小屋の中を整頓し、七時吾々は暴風雪の二晩を庇護して寒れた懷しの小屋を後にした。全く冰雪に被はれてしまつた岩場下山道は運々として進まなかつた。といふのはまだ一度もマッターホルンに登つた事が無いので道を知らぬ点もあつたのだ。従つて出来るだけ山稜につけて降つた。午後零時半吾々は心配しながら食料を持つて登つて来た二人の友人にあつた。そいつを呑み入もせりともさばり食つてから友の先導で遂に午後二時ヘルンリーカー小屋に着く事が出来た。そこで午後二時ヘルンリーカー小屋に登つて来た二人の友人に心からの歓待を受けた。然しそれはほんの二三人のもので包まれて吾々はモジモジを寝伏したのだった。

それから数時間後に吾々は全ツエルマットの民衆より一歓子を以て迎へられた。幸福なる勝利感は吾々の身うちを通り過ぎた。そしてやつと今になつて僕々と吾々の解いた問題が如何に大きなもの

のであつたのかを意識する様であつた。山の中なる山、彼のマツターホルンも遂に最後の秘密を奪はれたのだ。

同時にアルビニズムスの標石の永遠の表徵として立つて行く事だろう。

ヘルシュー小屋にて一九三一年九月十日記

附

ベルグシュルンド通過
夜營地到着

午前四時
午后六時半

ターンなものであつた。出席者一同の署名ある美しい巻物とアシエの案内者達は立派な北壁の写真を贈つた。

その後数日間シユミット達はザイラの客人としてモンゼルヴァンに滞在し、再び自転車に乗つてグラントヨラツスの北壁登攀の為にシヤモニヘと出発したが、又は実現せられなかつた。

尚最後の一九二三年がつ有まで此の北壁を登つた事を附記して置く。

(熊)

多摩水源行

水源にて

夜は全く明け放れたが空はどんどんよりと暗く、霧もたちこめて居るので眺望は全くない。懐しい大菩薩の峯も見えぬ。徑はゆるやかな登だが、また河原の中を行くやうに大きな石がゴロゴロしてゐて非常に歩き難い。流れは次第に細つて両岸を漸く迫つて来た。もう峠が近いらしく。藤兜橋を最後に渓流は桜と分れ、深々の音も殆どきこえなくなつた。右手に花崗岩の崩壊地が土牛の様につづく。微風が正面から吹き下してくれ。峠かながつべく。微風が正面から吹き下してくれ。峠かな

實業の登攀に費される。此の登攀を価値あき
ものとけふす者がある。然しマツターホルンの北壁に関する限りそれは何と云つてもせいか
一トルや二メートルの相違でいふ如きヴァリエイションとは訳が異ふ。之は全く今まで登られあか
つたつエイスの完全に新しいルートである。此等二人の登山家は私がザイラーによつてオテルモン、
セルヴァンに催された晩餐会の席上交へた暫くの間の会話より見るも、決してつしこード破りしの
型に入るもの達ではあかつた。此の祝宴は私が
嘗て出席した中でも最も愉快なものであり、そこが

一、四五八米の柳沢峠だった銅作りの鳥居は昭和三年九月の建立で、時の東京市长市來乙彦氏の筆による水神宮といふ額がかかるつてゐた。水神社の鳥居だ。暫く休んで居ると炭をついた馬が五六頭通りてゆく。晴れた日なら遠く富士の秀麗を仰ぐ此街道を多摩の水源地に一步踏み出した。二三丁目まで右半の谷間に注いでゐる。これは急いで水筒を販売しての水が市民の水道の出口で流れ生命の源泉の水だ!!。私は急に水筒を販売しての水概に今まで続いてゐるのかと思ふと形容の出来ない感覚を詰めこなしてしまふ。それでリエックの中へ收め改めてコツコツと歩くやうに現れた。金明落合今まで水よ今日の一日はお前と一緒に旅をするのだ。

と、近くの高原附近の樹種は、樹、栗などが多く紅葉はさほど高く美しい事ではなかつたが、落葉松のあの黄葉は信濃高原状となつて千米を越える山中とはとて、しかも降る大峠付近は珍らしい緩斜面が続いて、そして地形も峠は近くは次第に廣く御屋敷部落附近まで来る。

でも秀へられなかつた。まるで相模丘陵をゆくやうな感じだつた。其高原の端に落合の部落がありかへつてゐるのだけつた。荒物屋を兼ねた此部落唯一らしい宿屋の店先には赤たすきかけの小娘がまめくしく立働いてゐた。多摩水源地を守る命の源泉林事務所の中には人影も見えなかつた。何とふ平和な村里だらう。そして、よくもこんな深い處に何時の世からか庄みならしたものだらう。山の塗の方一尺高さ二間もある里程標がねつと立ち塞がるやうに現れた。筆太に書かれた文字は「奥宮参道」とある。から水神社の奥宮へゆくのだが、急ぐ身を忘れて思はず二三歩その方に踏入れた。丹波山は「奥宮参道」を越えて来た。里程標に又こう書いてあつた。丹波山は「奥宮参道」を十二糠、小河内二十八糠、柳沢峠四糠、柳沢峠四糠には絶景がある。丹波山への十二糠には絶景がある。丹波山は正午だ。時計は丁度九時を過ぎて居た。よし、小河内へ二十八糠、柳沢峠四糠には絶景がある。丹波山へ約半里、藤尾の部落を過ぎる頃から急瀬が相次いで現れ始めた。これから奥秋の餘慶兩岸の尾根は漸く高く、淡は次第に深く、弁湍、

介で、此絶景を見ずして多摩川を語ることは出来ない。射山渓あたりの多摩川や、鳩の巣の奇勝を以て天下の美景と称するのは青梅鉄道の客引の宣傳によるが、多摩川の真價を傳へるものではな

い。藤尾橋を渡つてから搔は次第に渓流を離れて山腹をまわつてゆく。木の間がくれた見えてゐた渓も何時しか数百尺の下となり。激流の響のみが遠雷の如く震いてゐる。地図の一。一八米の記入とある辺は此渓谷中で一番廣い、すぐれた眺望を持つてゐる。見渡す限り峯も谷も水源を涵養する森林は茂つてそれが一面に燃えるやうな紅葉だ。これから谷底をめがけて一條の細径が急降してゐる。之を下れば黒川鉢山全盛時代の傳説大終もオイラン渓と、多摩全渓中唯一の瀑布が見られるのだ。先を急ぐ身の心残りだったが割愛してしまつた。が、ラ

(香山浩一郎)

編輯後記

△十一月号発行の豫定が都合上振り大変おくれてしまひ投稿者並びに會員諸兄に申訳ない十二月号も近日中に出す積りです。

△浦松佐美太郎氏は先般 Miss Uenaka とハイテンされたり。